

夢オチばかりの夢宮くん

FAKE MEMORY

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

夢宮はとにかくいろいろな夢を見る！

なんかわからんがいろいろな夢を！

そんなやつのは日常は多分こんな感じ。

小説家になろうの方でも投稿しております。

ユーザー名はくりーんです。

# 目次

夢オチばかりの夢宮くん	1
一人一つの星々	6
ラブコメ	11
虫取	16
土砂降りと少女	21

## 夢オチばかりの夢宮くん

いつも通り朝早くに、俺は起きる。

俺はその時少しの違和感に疑問を持ち。窓の外を見る。

そこには今まで見たこともない悲劇が広がっていた。

町が真っ赤に染まり。マンションはどこも崩れていた。

そして驚いたのはここからだ。空には見たことが一度もない。しかし、どこか見覚えのあるものが辺りを飛行していたのだ。

いくつもの巨大な円盤の飛行物体。俗に言うUFOだ。

俺は自分の力が見いだされ、特別な防衛施設へ入所した。

最近モンスターと呼ばれる怪物が出現し。防衛施設で特別攻撃隊としてエースを張っていた俺は、その撃破にあたっていた。

今まで何度も何度も強力な怪物とは戦ってはいたが、今回のような空からの侵略者ははじめてだ。

俺の親しんだ町がみるみる内に破壊されていく。

今までこんなことなんて無かった。被害なんてそんな広いものは無かったし。戦うにしても相手は一体だ。こんな話にならない。

悲鳴が聞こえるが、次第に少なくなっていく。

俺の顔は恐らく真っ青になっていることだろう。

「チクシヨオオオ！」

気付いたら脚は動いていた。近くにいたUFOに向かって物凄い速さで駆け抜ける。

「ウォラー！」

勢いに身を任せ、思い切りパンチを叩き込む。

不意からの一撃だからか。バランスを崩したUFOは体制を整えられずそのまま地面へ激突する。

飛び上がる気配はない、どうやらやれたようだ。

しかし今の激しい衝撃で周辺のUFOが幾つも駆けつけてくる。

そして、レーザーが土砂降りのように降り注いでいく。

「くそつたれ！」

何百、何千、という数のレーザーが降り注ぐ。

それを俺は紙一重で避けていく。

走って、跳んで。数分間のやり取りで、俺はなんとか隙を見つけ、懐へ飛び込む。

一か八かの飛び込み、これが功を成し、拳を叩き込むことに成功する。

すると、簡単に吹き飛び、爆発を起こす。

攻撃は激しいが、装甲は堅くないようだ。

それなら勝機はある！

「もう一機！」

先程の攻撃で動揺したのか一瞬攻撃が止んだ。その時を見逃さず。おれはさらに突っ込んでいき、一機、もう一機と潰していく。

UFOも流石に不味いと思ったのか、徐々にワープを開始していく。

そして静かになった大地、日が昇り、辺りは煙が上がるだけとなった。

「もう・・・誰もいねえのか。」

辺りを見回しても何も声が聞こえない。そして誰も存在しない。

他に誰もいない。こんなところにいたとして。何の意味があるのだろうか。

俺は無力だ。反吐がでるくらい無力だ。自分の身は守れても。他人なんて守れやしなかった。

そんな自分に嫌悪感が湧いてくる。

この町には沢山の思い出が詰まっていた。友達とバカやって。家族とご飯食べて、時にラブコメして、大切な時間を過ごしてきた  
それなのに。

「それなのに・・・全部・・・全部無くなっちゃったのかよおお！」

「確かに。確かに！最近物騒になって。ヤバいのかなとか思ってた

さ！だとしても……こんなものってねえだろうがよおおおお！」

泣き叫ぶ。一人になったこの世界で。ただただ泣き叫ぶ。

こんなに泣いたのはいつ振りだろうか。

涙は抑えることができなかった。

俺は悔しかった。

この町に誰一人も守れず。こうして俺だけ生きていることが。

悔しかった。

しかし時間は待っていてはくれなかった。

突然、空を覆うようにして現れたのは、何百ものUFO。

そして武装も先程とは比べ物にならないくらい強力そうだ。

「チツ、もう来やがったか。しかも、容赦する気はもう無いらしいな」

俺はそう言い放ち。ポケットから煙草取り出す。

そして一回ふかし、その場に捨て、踏みつける。

どうやら相手は全力で俺を潰しに来るらしい。

だが、俺もここで一つ意思表示として。あいつらに一つ言おうじやないか。

「来いよ侵略者。<sup>インベーダー</sup>俺がまとめてぶっ潰してやるよ!」  
相手も何かを察したのか、一斉に射撃を開始する。

そして俺はそれを真正面から猛ダツシユで突撃していく。

「ウオオオオオオオオ!!!」  
レーザーの爆発音と、少年の叫びが交わる。

これは一人の少年が、全てを背負い、戦う物語である。

「ていう夢を見たんだけど。面白くね?」

「いや、まあおもしろいけどさ。いろいろ言いたいことありすぎるんだが」

ところ変わってここはとある高校。

二人の男子高校生が、何やら楽しそうな会話をしていた。

一人は心底楽しそうに。もう一人は、微妙な表情をしているが、こちらも楽しそうにしている。

夢を見たと言っていた少年は、良い反応が得られず少し微妙な表情をした。

「そんなに変わったか？」

「…わかった。一番気になったところだけ簡潔に言おう」

「来い！誉めろ！称えろ！」

「自分を美化しすぎなんだよコノヤロオオオ!!なんなのその夢の中のお前！臭い！お前らしくなくて臭い！」

「え、それは酷くね？」

夢オチばかりの夢宮くん。これは、日々変わった夢を見る、少し変わった少年の、一般的な日常の物語である。

困みに夢見てる方が夢宮で、もう片方は鈴木な。



## 一人一つの星々

今回も登場！夢宮だ！昨日は激しい戦闘（夢の中）を行ったからか、疲れちまったぜ…

今は授業が終わり、昼休みに入って飯も食い終わっているから寝るところだ。

やっぱ眠くなるんだよな。飯食ったあとって。

俺は教科書を重ね、さっさと寝る体制に入る。

学校での一番の至高の一時だ。おらは早く寝るだ。

そう思い早速顔を伏せ、ゆっくりと夢の中へ沈んで行く。

ドリームインザファイヤー… 意味は良く分からない!!

… 行を稼ぎたいんだよ!!!!

フツ今回も仕事で疲れちまったぜ。今日はどこへ寄るとしようか。やはりいつもの所か？そう思い、すぐさま行き付けのバーへ直行する。

カランカラン。ドアを開けるとベルの音になる。やはりこのベルは心地の良い音を鳴らす… 実に良い。

「いらっしやい… なんだ、夢宮か。カウンターで良いか？」

マスターがグラスを拭きながら声を掛ける。

そして俺は答えを言うまでもなく、カウンターへ向かい、腰を掛ける。

「フツ、なんだ、か。他の客が良かったのか？」

「何を今更。俺とお前の仲じゃないか」

H A H A H A、とお互いに軽く冗談を良いながら超イケメンな笑い方をする・・・

フツ俺超超イケメンだ。

さて、ここに来たんだ。今日もあのウイスキーでも頼むでしょう。

「マスター、いつものをロックで頼む」

「ほう、畏まりました・・・なんか良いことでもあったのか？」

「フツ、分かるか？」

マスターの問いに、俺はニヤリと笑みを浮かべる。

ここに来れば年の差は関係ない。皆が家族のようだ。

マスターは家族のことは何でもお見通しなんだ。

「君がそれをロックで頼むということとは、そういうことでしょうか？」

俺の問いに、マスターも笑みを浮かべる。

俺はそれを見て今日の出来事について語り始めた。

「可愛い子に目をつけられたのさ。先にその女の子から話し掛けられて、そのまま連絡交換をねだってきた。勿論応じたよ。優しくて良い子だ。」

「なるほど、確かにフラれてばかりだった君にはかなりのビツクニュースだ」

「フツそれは言わない約束だろ？」

H A H A H A、と笑い声が響き渡る。

この曜日の夜はほとんど俺しか来ることはなく、そして今日も俺しかいない。

こういう日にはいつもマスターと世間話をして楽しむ。

成人になる前はここがアルバイト先で、悩みごとがあるとすぐに相談してくれた。

「しかし、改めて思うが、大分大人びたな。アルバイトしていたときの元気にはしゃぐ姿が嘘のようだよ」

「あのときは青春に全力で命を注いでいてね・・・今思うとあれから三年、口調は大分変わったが、まだ学生時代が抜けきらないな」

「良いじゃないか。まだ若いのだから。青春・・・俺にもそんな時代

が有ったな」

マスターの突然の言葉に、俺は少し驚いてしまった。

「マスターも？」

「H A H A H A。当たり前じゃないか。青春、それは誰もが見るこ  
とができる。そして、心の中でも永遠に輝き続ける。俺達の一人一つ  
しか持てない星なのだから」

「星、か。俺の星は輝いていたのだろうか」

「フツ。勿論君も輝いていたはずだよ。心の星は、どれも皆等しく、  
明るく輝けるものだよ。どんなことがあるうとも、自分の星は絶対に  
否定してはいけない。それは星の光を飲み込む一つの暗闇となりえ  
るからだ。輝きを信じれば、これからの苦難だって乗り越えられるは  
ずさ。俺はそうやって生きてきたからな」

やはりこの人は凄い。単純にそう思う。

こんな美しくも力強い人間に俺は少しでも近づきたい。

素直にそう思った。

ここに来る人たちは皆口を揃えて言うんだ。

困ったらあそこへ行ってみろ。マスターは人生を変えてくれる、  
と。

「やはり美味しいな、二杯目はどうも迷ってしまった」

「私の目はまだ衰えるつもりはないからね。ふむ、昨日仕入れた良  
いやつがあるのだが、一杯どうだね」

「ほう、ならそれを頼む」

「畏まりました」

駅から少し離れた、隠れた名店。

訪れる人は多くはないが、訪れた人は皆、笑顔になって帰っていく。  
俺のお気に入りの場所だ。

ふむ… 今日の夜はまだ長そうだ。

「… あれ、もうすぐ昼休みも終わりか。良く寝たし、次の授業の準備しねーと… それと、マスター。俺、頑張るよ。俺の星、全力で磨いていくぜ」

外を見つめ、そう呟く。

ふと、マスターが笑顔になる姿が頭に浮かんだ。

夢の中の話ではあるが、マスターの言葉は俺の心に響き渡った。

俺もあの人のようになりたいと。そう思った。

だって超イケメンだし。俺も髭生やしたい。

ただそれとともに、大人になるという虚しさを感じる。

いつまでもこうやってはしゃいでいることができないのだ。

大人になれば我慢しなければ、耐えなければいけないことがたくさんあるはずだ。

今でしか出来ないことも、きつとたくさんある。

今のうちに、やりたいこと色々やっておかないとな。

チャイムが鳴り、授業が始まった。

いつも通りの授業だが、今日は何か輝いて見えた。

そして授業中、鈴木はずっと渋い顔をしていた。

恐らく寝言でも出てたのだろう。

ついでに言うのと授業終了後。

鈴木は、てめえにハードボイルドは似合わねえよ!!、とか言っ  
て殴って来やがった。

怯まずにお前はマスターを知った上で言ってるのか!!と叫んだら  
いや、知らねーよ!!とか言っ  
てまた殴られた。解せぬ。

## ラブコメ

朝、いつも通り席へと直行し、友人に挨拶をする。

何気無い日常。流星にいつもテンション爆上げヒヤッホイ。

なに、時に真面目な文章も書くもんさ。

「よっす、鈴木」

その呼び掛けでこちらに気づき、こちらを振り向くSUZUKI。

他意はない、そう他意は。

「おっす夢宮、今日もアホみたいな夢でもみたか？」

「アホとは失礼な。あのファンタスティックな世界なんて早々ねえだろ」

「いや、訳わかんねえよ。お前の頭マジファンタスティックだろ」

「んだとコラ」

こいつまだ俺の心の友を馬鹿にしてるな。お前もマスターと会ってこいよ、マジ尊敬するから。

「つたく、そんなんだからモテないんだろ。夢の世界とか。お前どんだけメルヘンなんだよ。」

「フツ、それは言わない約……ぐほお!!」

おい、殴るのは反則だろ。

「てめえ殴りやがったな。親父にも週一くらいでしか殴られねえのに!!」

「割りと殴られてんじゃねえか。むしろ心配になるわ」

安心しろ。主にツツコミという名の正拳だ。

とはいえ、入学時に女子へのコミュ障を発動して以来知り合いがない。

いやだつてモテたいじゃん。いや、せめてモテなくても良いから彼女くらい欲しい。高校生だけ高校生。そりゃあ欲しいだろ。

っーか鈴木。お前なんでそこそこモテてるんだよ。アイツがモテて俺がモテない筈がない!!

「よし、今日は女の子の知り合いを作る。連絡交換もする。それが目標ダツ！作戦名、超ワツシヨイツ!!」

今日こそ、今日こそ知り合い作る。悲しみを断ちきらなければ先はない!!おい鈴木面倒くさそうな顔すんな。

あれから昼休みになった、俺の作戦概要は主に女子と喋る。それだけだ。

なんかナンパみたいだな。

まあなんだかんだ話すけどそれだけで終わる。

なんか違うんだ。

もつとこう・・・なんだろうね。

「なぜだ・・・なぜ誰とも・・・ハッ!もしかして俺結構避けられてたり!なんてことだ・・・俺は・・・死んだ」

チクショウ!ことあるごとに鈴木にばっかり声掛けやがって!

俺はどうした!

「安心しろよ、夢宮。実際照れてるだけだから」

「そうだったらどれだけ良かったことか!絶対避けてるだけどころ!」

「まあ避けてるのは事実だけどな。つーかお前噛んだろ」

「くそつたれ!」

勢いのまま立ち上がり走り出す。もう知らねーよ!

「いや、避けてる理由はお前のこと好きな人が・・・おいどこ行くんだよ」

「屋上じゃボケエ!」

「・・・まあ昼ならむしろ丁度いいか。お前の謎作戦も報われるかな」

んだよ聞こえねーな!

屋上ナウ。そんな感じに黄昏ています。はあ・・・まあどうせこうだろうとは思ってたさ、思ってたけどさ。

「だからって…こんなおつてねえだろうがよおおお！」  
なんかどつかで聞いたことのあるセリフだがそんなことは知らねえ。

とにかく今は悲しみに浸る。

「あれ、夢宮くん？」

「なんや、今落ち込んだんねん。つてあれ？」

「もしか、貴方は…俺らの学年でそこそこモテてる桜沢さん!!」

「そ、そこそこ…」

何を隠そうこの人は少し背が低く、幼い顔立ちでそこそこ人気で、そしてそこそこモテてる桜木町駅さんだ。

「やべ、変換ミスった。桜沢さんだ。」

「そう！そこそこ！」

「それ、褒めてるの？」

「え？普通に褒めてるけど」

「え？あ、そうなんだ」

なんだその歯切れの悪い返事は。

良いじゃねえかそこそこつて要はモテてるってことだろ？

何を高望みしてるんだか。

「それにしても珍しいね。いつも教室で食べてるでしょ？何で急に屋上に来たの？」

「ん？いや、何となくだけど…」

んなこと聞くなや！何でさっきのこと話さんとアカンねん！

まあエセ関西弁はとにかくとして、なぜ昼休み終わってすぐ屋上に行くようなやつが、俺が教室で食べてること知ってるのだろうか。

あれか、普段教室からあまり出ようとしないからそう思われてるのか？

いや、それで勝手にそう思ってるなら泣くんだけど。

「そっかー、なんとなくか。じゃあさ、もしよかったら一緒にご飯食べない？」

「ん？ああ。別に良いけど」

「やったー！お隣、失礼するよ」



そう言つて桜沢は隣へ座る。近い。

正直言つてこんなことは始めてなので。何を話せば良いのか分からなくなる。

世間話か？世間話が安パイか？

そんなことを考えている先に桜沢が口を開く。

「夢宮くんってさ、アニメとかつて見たりする？」

「めっちゃ見てるけど」

即答する。

あんな夢を見るんだからもちろんそうに決まつてるだろ。

内心あの夢は恐らくほとんどアニメの影響だろうとか思つてる。

「そうなの？実は私も良くアニメ見るんだけどさ」

「え？マジで？じゃあ今期の…」

そこから俺と桜沢のアニメトークが始まる。

おい、お前アニメオタだったのかよ。奇遇だな俺もだよ。

このあと延々とアニメやラノベの話をしながらか弁当食べてた。

それから数十分が経ち。授業五分前のチャイムがなる。

「やべ、もう授業か、早く戻らねーと」

そう言つて屋上の出口へ歩いていく。

「ちよ、ちよつと待って！良かったらさ、wine交換しない？」

「え、俺未成年なだけで」

「いや！そつちじゃないよ。トークアプリの！」

ん？あー確かそんなのあったな。あんま使わないから忘れてたわ。

「おう、いいぜ」

「やったー」

特に拒む理由はないので受け入れておく。

ていうか何でさつきからそんなに喜ぶんですかね。

それマジ天使。

ピロリン、という電子音が鳴り、画面に☆さくらざわ☆の文字が現れる。

やはり女子は何かしら付けたがるのか？この☆は一体なんなんだ？

全ては暗闇の中へ…

「よし、ありがとーじゃ、戻ろっか」

そう言つて教室へ戻つて行く。

うん、俺が思つてたのと何か違うけど。連絡先貰えたし、よしとするか。

そして俺も教室へ向かった。

ていう正夢だ。

## 虫取

「暑い」

そう、暑い。

それもそのはず今は7月。

夜ではあるが、完全に夏である。

だが俺は暑さなど気にしては行けない。

なぜなら俺は。

「昆虫採取をするからだー！」

「はあ・・・」

「わ、私虫苦手なんだけど・・・」

俺が誘ってきたのはこの二人、鈴木と桜沢だ。

つーか何で皆否定的なんだよ。

おまえらノリノリだったじゃねーか。

それにさ、こういうの最高じゃん。

だってカブトムシだぞ、クワガタだぞ。

楽しいじゃんか。

「漢のロマンだろー！」

「私女の子・・・」

「めんどくせえ・・・」

くっ反応が・・・今に見てる・・・俺がでっけークワガタ捕まえてきてやる。

とはいえやはり思う。

「んー、あんまり好評じゃないな」

「俺は前クワガタ飼ってたし、嫌な訳じゃないけど・・・」

「私は・・・えっと、まあとにかく行こー！」

なんだよ気になるな。まあ来てくれるのなら別に良いんだけど。

ここはとある林。友人の私有地だから話を通して入れるように許可してもらった。

仕掛けは午前中にその友人のもと三つほど仕掛けておいた。  
餌は黒蜜を使う有名なやつ。

ライトもいくつか使った。

またバイトめちやくちやいれなければ…

まず一つ目、この周辺は毎年比較的昆虫が集まりやすい木だ。

目当てのクワガタがいれば良いのだが。

「あつたあつた。これが一つ目」

「お、カブトムシいるじゃん」

「まあカブトムシは割りと採れるんだよな。カブトムシついでかいしカツコいいけど排泄物が多いしめちやくちや食べるから大変なんだよな」

「蛾がいっぱい… あ、でもこのクワガタ可愛い」

「ああ、コクワか、長生きするし飼いやすいし、試しに飼ってみても良いかもな、虫かご家にあるし良かったらあげるけど」

「本当に？ありがと！」

「おう、大事にしろよ」

ふむ、ここら辺には目当てのクワガタが居なさそうだな。

早めに切り上げて次に行くとするか。

「二つ目も見つからなかったな、ここは結構自信あつたんだけどな。」

あれから途中の木の隙間なども探しているが、目当てのクワガタは見つかっていない。

ノコギリクワガタとかは見るとは見るんだけどな。

今日も見つからず結局また明日とかはさすがに面倒だ。

「んーやっぱあいつは罨よりルッキングかーでもそれはきついからその次で見つかって欲しいなー」

「あーみてみて！このクワガタおっきい！」

「なに?！」

俺は早速桜沢のほうへ近寄る。すると木の隙間から顔を出している、お目当てのクワガタを発見した。

「おーよっしゃー！良くやった！こいつが目当てだったんだよ！」

「なるほど、ヒラタクワガタか」

「そうそう。今回はノコギリとかじゃなくてこういうのが良いかと思ってる」

でかいしカツコいいし長生きする。

気性が荒いつてもグッド。

それにしてもでかいの見つけたなー。

あとは仕掛けにメスが掛かっていれば最高なんだけどな。

「んじゃ、最後の仕掛けもこのまま見に行くか。お願いだから採れてくれ」

俺は期待とともに次の仕掛けへと足を進めていった。

あのあと、無事メスも見つかり、一件落着。今は林を出るために歩いているとこだ。  
とこなのだが。

「何でこんな時間に蜂が飛んでるんだよ」

なぜかこんな時間に大きめの蜂が飛んでいる

おい、というかなんだこの不可解な現象。

間違はなくフラグが立ってるだろ。

神様はオチを作らないと気がすまないのか…

たりめーだろ話作ってんだから。

…なんか天の声が聞こえた気がするがそれはどうでも良い。

もうちよつとマシなオチはないのかと少し憤りを覚えるが。

俺は怒ったぞおおお！

いや、冷静になれ。確かこんなときは動かないのが一番。

のはずだが、お構い無しに迫ってくる蜂。

おい、こいつスズメバチやん。洒落にならんぞ。

それにしてもあいつら蜂がいるのに妙に静かだな。  
つてあれ、そう言えばあいつらいねえ。

え？なんで？

「ちよつと待てさすがに薄情すぎねーか？泣けるんだけど」  
動揺してる俺にお構い無しに近づいてくる蜂。

そして蜂が鼻に止まり。

俺に針を突き立てた。

「いっでええええ!!てなんだこれマジ痛い痛い!!」

なんかに挟まれてる。これガチで痛い。

なんだか良くわからないので、とりあえずそつと鼻を触ると何か知らない固い物体が。そして今度は指を挟まれた。

「ゆ、指があああ!!て、これ俺のヒラタクワガタやん。なんてことすんだよ」

「むー、それはこっちの台詞だよ。せつかく勉強に誘ってくれたと思ったらクワガタと遊んでるし。おまけに昼御飯食べたらすぐ寝ちやうんだもん」

あの一件以来、秋葉原へ買い物へ行ったりと大分仲良くなった桜沢。

今日は俺の家で一緒に勉強をしていた。

はずなのだが俺が休憩の時にクワガタを玄関から持ち出して、昼飯食べて寝たらなんか挟まれて。桜沢が不機嫌になった。

「それはすまんかった。少し目をつぶったら寝てたわ」

「んー、まあそんなに怒ってないから別にいいけど。それにしてもこのクワガタ可愛いね」

「ああ、そのクワガタはコクワガタってやつで。基本的に飼いやすい種類なんだ」

「へー」

「もしよかったら今度捕まえに行く?」

「んー遠慮したいかな」

やはり夢と同じようにはいかないのだった。

## 土砂降りと少女

雨が降る日のことだ。放課後、暇で暇で死にそうになっていたので仕方なく外へ出ることにした。

外に出るとはいえ、やることが無さすぎるのには変わりはないが、歩くだけで気が紛れる気がしたのだ。

決して夢のときみたいなのに、何か出会いがあるのではないかと思って出たわけではない。断じて、無い。

いやー何か起きないかなー。

20分ほどたつただろうか。スマホを見ると、丁度20分経っていた。やったぜ。

ふっ、遂に俺は野生の勘を取り戻し始めたか。さすが俺。

…そろそろ現実逃避をやめるか。時には現実に戻らなければならぬときがある。

普段から夢が現実になるなんて簡単なことを考えてはいけない。夢が現実になるように努力しろ。ただ願うだけなら、それはただの妄想だ。確かに逃げるのも大切だが、今はその時では無いだろうか？と、マスターもそう言っていた。

しかしこれは不味いな。

「うおおおおお!!雨が、雨が強いツツツ!!」

絶賛土砂降り中。

俺は必死に雨宿りする場所を探していた。やべっ靴下が崩壊した。靴、浸水ツツ!!

なんてアホみたいなこと叫んでると、丁度駄菓子屋を発見した。勿論直行。直ぐ様傘を閉じ、既に錆びてきている傘立てにいれる。漂う昭和の香り。近所にこんな店があるとは思いましなかった。

中へ入ってみると、様々な駄菓子や、カップ麺、アイス、安いジュース等、かなり品揃えは豊富。

奥には鉄板のついている机があり、メニューを見てみると、どうや



らもんじや焼き等を食べれるようだ。

「いらつしやいませー。失礼かもしれませんが、もしかして高校生ですか?」

店員の女性に声を掛けられる。高校生が来るのは珍しいのだろうか。

前、適当に旅行をしたときは駄菓子屋に高校生が群れていたが。見た感じ、店員はセーラー服の上にエプロンの姿だった。中学生くらいだろうか…。恐らく、放課後に親の手伝い、といったところだろう。

「ああそうだけど。適当に外歩いてたらめちやくちや雨降って来ちゃってね。死んだ」

「んな大袈裟な…。」

いや、割りと大袈裟じゃない。

それにしても、雨弱まんねえな。此れじゃまだ帰れそうにない。

「あ、そうだ。自己紹介！私は国府津彩音、中一だよ」

突然店員に自己紹介をされる。やはり中学生だったようだ。

おい、敬語どうした。

まあ、むしろこっちの方が接しやすいいいけど。

「おう、俺は夢宮、高一だ。よろしくな…。にしても、良かったのか?急に名前まで教えて」

「うん、何て言うか…。いつも店番するときには小学生ばかりで…。友達はショッピングモールとか行くから」

ああ、なるほど。近くにあるもんな。そりやそっち行くわ。

だからか、高校生とかが珍しいってのは。

「なるほど、話し相手が欲しいと」

「そうーそういうことー今日は雨だし、人も来ないから退屈で…。」  
ふむ、確かに退屈だよな。俺も暇だし。

「よし、じゃあさっそく、あのゲーム、どうやってやるんだ?」  
そう言って指差すのは、いわゆるパチンコ。

カーレースと書いてある。景品は、ここの買い物券って感じか。確かテレビを見た。

「ああ、あれね。そのまんまだよ。お金入れて弾くだけ」  
「オーケー、じゃ早速やるか」

お金を投入すると。スタートする場所に10円が設置される。ほう、これを一番下のゴールに入れると買い物券が貰えると。

早速打ってみる。最初は適当に思いつきり打つと穴を通り抜けてくれるが、進むにつれ壁がなくなり、力加減が難しくなっていく。

2回、3回と挑戦していくが、壁を突っ切ったり、穴に落ちたりと、大分苦戦する。

だが、あまりこの手のゲームはやったこと無いので、思ったより楽しく、何度もやってしまう。

4回

5回

6回

「ぬおおお!!できねえええ!」

8回目で最後まで行くようにはなったが、最後がどうにも出来ない。

「はあ、最初はまあそんなもんだよ。最後のところはごり押しで全力で打てば簡単に入るよ」

「そうなのか?じゃあやってみるか」

10円を投入そして弾いて弾いて。あ、やべ。

「そこ失敗したらどうにもならないんだけど…」

「うるせえわ」

15回目、なんとか最後までたどり着くことが出来たので最後の弾きに挑戦する。

全力で引つ張って、打つ!

そうすると、上手くかべに跳ね返り、戻ってきた10円玉がゴールへ入り、カタつと音がする。どうやら成功したようだ。早速景品の取り出し口に手を入れると、20円分の買い物券。

「うおい。あんだだけやってこれだけかよ」

「ふふっ。毎度ありー。ふつうはこんなに失敗しないんだけどね。まさかここまで下手だとは…。」

くっ可愛い顔しやがって。この小悪魔が。

「20円か…。んーチョコでも買うか」

そうして、10円のチョコを2つ買い。口に入れる。うん、ふつうのチョコだ。

「他にも色々ゲームあるのか。ちょっとやってみるか」

そうして、どっかのテレビでも見たことのある。ピエロのゲームや、レトロなアーケードゲーム等で遊んだ。

やっべ、金使いすぎたな。

「んーなんか腹減ってくるな」

色々なゲーム等で遊んでいたからか、時間のことをわすれていた。だが土砂降りは続く。

「…じゃあさ、良かったらお好み焼きでも食べる？」

めっちゃ食いたい。

「んー、でも結構お金使っちゃったからなー」

「お金なんて良いよ！あんなに落としてってくれたんだし」  
甦る負けまくった記憶。金銭的な意味でも、格闘ゲーム的な意味でも。  
俺は迷わない。

「そうか、なら食べてこうかな」

「わかった！じゃあ早速つくってあげるよ！」

そう言っつて、鉄板のスイッチを入れ、カウンターの奥へ何かを取りに行く。すると数分後、お好み焼きの具が入ったボウルを持ってきた。

「よし、それじゃあ鉄板にどーん」

手慣れた手つきでお好み焼きを作る、いつも作っているのか、綺麗にひっくり返し、焼けるとソースやマヨネーズをかけ、鰹節をかける。

「おおー、良い香りがする」

「お好み焼きが完成すると、お好み焼きを網目に切っけていき、皿を2つ置く。」

「あ、食べるのね」

「当たり前でしょ、全部な訳無いじゃん。タダなんだし」  
「そうだよな。」

早速、1つ取り食べる。熱々で旨い。久し振りに鉄板の良さを味わった気がする。

「んー！美味しい！やっぱり美味しいなー」

国府津はそう言っけて1つ、もう1つと食べていく。俺もまた1つ取り、食べていく。数分すると、国府津の手が止まり、こちらをじつと見てくる。どうしたのだろうか。

「あのさ…」

「うん？」

「良かったらで良いんだけど… 夢兄っけて呼んでもいい？」

思わず冷めるまもなくお好み焼きを飲み込んでしまった、熱い。

「ぐほうっ！ヴ、うん。おう？急になんしたん？」

「今日、初めて会っけたけどね、こうやっけて遊んでみて、お兄ちゃんが  
いればこんなのかなんか思っけて。私妹はいるんだけど、妹も良くと  
こか遊びに行っっちゃうし…」

「そっか… 俺で良ければ別に良いぞ。いつも遊びにこれるわけ  
もないけど」

「本当に？じゃあ、改めてよろしく！夢宮くん」

「呼ばんのかい。」

辺りも暗くなっけてきた頃。やっくと雨も弱くなり、俺は家に戻ろうと  
してっけて。

「よし、それじゃそろそろ帰るか。ありがとな。んじゃまた」

「うん。またね、夢兄！」

その笑顔、破壊力抜群。  
絶対狙ってたろ。

後日、鈴木との登校中に偶然国府津と会い、夢兄と呼ばれて鈴木に  
通報されそうになったのは別のはなし。

※これは夢ではありません。